

地域の子育てを総合的に支援 「のびすく若林」が開館

10月1日、若林区中央市民センター別棟等複合施設内に、子育てふれあいプラザ若林（のびすく若林）がオープンしました。

「のびすく若林」は、乳幼児親子を対象とした子育て支援施設。子どもと一緒に過ごせる交流スペースやひろば、託児室などを備えており、乳幼児親子の交流の場の提供、乳幼児の一時預かり、子育てに関する相談や情報提供などを行います。今回の開館により、市内5区全てにのびすくが整備されました。地域における子育て世帯へのサポートのさらなる充実につ



▲のびすく若林が入る若林区中央市民センター別棟等複合施設



◀明るく広々とした施設内にはさまざまな遊具があり、親子で楽しめます

市政トピックス

市立病院「ふれあいまつり2017」開催

地域の方々との触れ合いを深めるとともに、市民の皆さんの疾病予防・健康増進の手助けとなるよう、9月30日、市立病院で「ふれあいまつり2017」が開催されました。

会場では、骨密度・体脂肪測定や頸動脈エコー検査などの健康チェックコーナーをはじめ、薬剤師

▼倒れている人がいたときの対応を確認するBLS（一次救命措置）の実演も行われました



▲消防ヘリ離着陸見学。大きな音とともに消防ヘリが離陸すると、参加した皆さんは笑顔で手を振っていました



▲開館記念式では、南小泉児童館に通う児童6人が代表のことばを述べました

なげていきます。

また、複合施設内には移転改築した若林区中央市民センター別棟、南小泉児童館、市社会福祉協議会若林区事務所を設置。9月30日に開館記念式を開催し、郡市長は「地域の活性化や福祉の充実に貢献できるよう、各機関が連携しながら力を尽くしてまいります」とあいさつしました。

のびすく若林／所在地：若林区保春院前丁3-1-2階（☎282・1516、FAX282・1609）／開館時間：午前9時～午後5時（託児室は午後4時半まで）／休館日：月曜日、祝日の翌日（土・日曜日、祝日は開館）、年末年始

市政トピックス

「晩翠わかば賞」「晩翠あおば賞」受賞者が決まりました

や管理栄養士による相談コーナー、救急車・消防車の展示、ダンスや楽器演奏のステージイベントなどを開催。子どもからお年寄りまでたくさんの方が来場し、イベントを楽しんでいました。

また、屋上のヘリポートでは、抽選で消防ヘリの離着陸見学会も実施。普段は見ることができないヘリポートからの景色を眺めた後、実際に消防ヘリ「けやき」がやってくると、移動の速さや間近に來たときの迫力に参加者からは驚きの声が上がっていました。

仙台出身の詩人で「荒城の月」などの作品で知られる土井晩翠の業績を記念した「晩翠わかば賞」「晩翠あおば賞」の本年度の受賞者が決定し、10月22日に仙台文学館で贈呈式が行われました。

市政トピックス

メキシコ地震・国際消防救助隊隊員が帰国し活動を報告

メキシコ中部で日本時間9月20日に発生した大地震の被災地支援のため、同日から国際消防救助隊（IRT）として仙台市消防局からメキシコに派遣されていた救助隊員3人が9月28日に帰国し、翌29日、郡市長に現地での活動内容を報告しました。

3人は、首都メキシコ市内の倒壊したアパートなどで人命救助等に従事。探査機などを使って行方不明者の捜索に当たり、生存していた犬を救出するなど、現地の救助活動に貢献しました。

郡市長は「東日本大震災時の支援への恩返しにもなったと思います。市民の誇りです」と述べ、3



▲写真で現場の様子を示しながら活動の報告をする隊員

市政トピックス

地域の防犯活動に貢献された方を表彰

人にその功績をたたえる表彰状を授与しました。隊員は「周りのサポートもあり円滑に活動できた。今回の経験を市民のため、国民のために生かしていきたい」と使命感を新たにしていました。

市では、長年にわたり地域における防犯活動に取り組んでいる方々を毎年表彰しています。10月13日に行われた全国地域安全運動第29回仙台市大会で、7団体・94人の方々が表彰されました。

このうち、防犯功労団体、防犯功労者、退任感謝状を贈呈した方は、次のとおりです（順不同・敬称略）。

〔防犯功労団体〕 本材木町親交会、東中田防犯協会、秋保防犯協会、八幡しろはとパトロール隊、小松島地区防犯協会実働隊、宮城野防犯協会、東仙台防犯指導隊

〔防犯功労者〕 瀬戸克而、梅津聡、大宮秀一、木村好伸、天満元昭、渡邊トシ子、加藤悟、佐々木正行、鶴山勝利、赤井畑弘盛

〔防犯指導隊退任〕 伊藤克彦、熊谷正己、熊坂俊男、小田常正、高橋徹、大宮東、佐藤好弘、佐藤光俊、中山幸榮、相澤豊子、阿蘇きよし、荒井洋子

3.11震災文庫を「渚にて」

「渚にて」あの日からの「みちのく怪談」



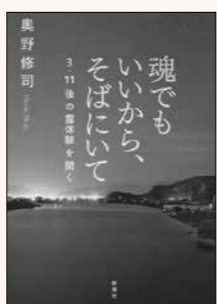
東北怪談同盟／編 南荒蝦夷 刊

気仙沼総局に赴任したのは、震災から2年後の春でした。被災地では復興のつち音に交じって、幽霊・怪異譚が遠慮がちにささやかれるようになった頃です。それらのいくつかは、戸惑いながらもどこか再会を懐かしむような、死者と生者の温かな交流譚とさえ思われました。

東北出身の作家10人による震災怪談集「渚にて」には、体験談や採話、創作による海辺の幽霊譚が多く取り上げられています。怪談とはいえ、ここでもおぞましさを戦慄、恐怖とは無縁です。津波で流された自宅跡地に現れる知り合いの子どもの幽霊や、津波の犠牲になった父の遺体に添えられていた見覚えある白い花弁など、深い愛惜の

思いに満ちています。こんな巷説を語る短編もあります。今回の震災では、タクシ1の座席をぬらす幽霊の話は聞かれませんが、そもそもずぶぬれの幽霊は、洞爺丸沈没事故（1954年）から口の端に上るようになったとか。震災の津波に遭っても、せめて「あの世の人」にはずぶぬれになってほしくないとい、生き残った人が願っているのではないかと。

「魂でもいいから、そばにいて」は、16の霊体験取材した「ノンフィクション」です。やはり、被災地の不思議で心震える出来事がつづられています。著者は語り手と3回以上会い、再現性を検証。死者と生者の再会を真実と位置付けました。



奥野修司／著 新潮社 刊

東日本大震災を語り継ぐため市民図書館に設けた「3・11震災文庫」。所蔵する約1万冊から、よりすぐりの本をご紹介します。

死者と生者が出会うとき 河北新報社 生活文化部次長 新迫 宏

「魂でもいいから、そばにいて」 3・11後の霊体験を聞く

※紹介した本は、市民図書館でご覧いただけます 問市民図書館 ☎261・15885